

福德神社『芽吹稲荷』御祭神・御由緒

主祭神

倉稲魂命

『宇迦之御魂神』(五穀主宰、生業の神)

相殿

天穂日命

(天孫降臨に先だち大国主命と和した神)

大己貴命

『大国主命』(出雲を中心とした葦原中国を統べた神)

少名彦名命

(大国主命とともに国造りをした医薬・温泉・酒造の神)

事代主命

(大国主命の第一子・物事をよく知り、国土経営に努む神)

三穂津媛命

(大国主命の後神)

江戸時代前に合祀

太田道灌

(江戸城を築城した戦国時代の武将)

江戸時代に合祀

弁財天

(インド由来の神・江戸城内より勧請)

徳川家康

『東照大権現』(徳川幕府を江戸に開府)

当神社の創祀された時は明らかではないが、当社に伝わる略記によると、清和天皇の御代の貞観年間(八五九〜八七六)には既に鎮座していたようである。

当社は、武蔵野の村落である福德村の稲荷神社として祀られ、その地名をとって社号とした。その鎮座する社地は広大にして、社殿も広壮であったと伝えられる。社の四隣は森林や田畑に囲まれ、周辺には農家が散在する片田舎であったとされる。土地の人々は当社の森を「稲荷の森」と呼び、その森の一端に建てられていた石造の里程標(一里塚)を「稲荷の森塚」と呼び習わしていた。この里程標は、後に明暦三年酉年(一六五七)正月八日の大地震により崩壊。当時の人々が散乱した石碑の破片を拾い集め、保存を図ったと伝えられる。左記は、その碑銘の写しである。

表

宮戸川邊り宇賀の池上に

裏

貞観元年卯年

立る一里塚より此福德村

三つき吉祥日

稲荷森塚迄一里

また、そもそも当社は、元来、武将の信仰が厚く、源義家朝臣(一〇三九〜一一〇六)により深く崇敬されていたことが記されていたとも伝えられている。江戸幕府以前には太田道灌公を合祀し、その兜・矢・鏃などが奉納されたと伝わっている。

徳川家康公は、江戸に入府した天正十八年(一五九〇)八月に初めて当社に参詣し、その後も数度に渡って参詣している。更に、二代將軍秀忠公は、慶長十九年(一六一四)正月八日に参詣した折、「福德とはまことにめでたい神号である」と称賛。この時、当社の古例である桐(クヌギ)の皮付き鳥居に春の若芽の萌え出でたのを御覧になり、神社の別名を『芽吹(めぶき)稲荷』と名付けられた。元和五年(一六一九)二月に御城内の弁天宮を当社に合祀するにあたり、將軍自ら神霊を納められ、大和錦の幌を奉納し、更には「社地縄張を三百三十三坪余り」と定められた。

福德神社社務所

〒一〇三—〇〇二二

東京都中央区日本橋室町二—四—十四

電話〇三—三二七六—三五五〇